

養鶏飼料工場のカキ殻堆積場におけるハエ類の夥しい発生について

藤井 幸彦・吉田 重義・高橋 忠史

香川県 坂出保健所

On the tremendous outbreak of flies at the piling yard of oyster shells
in the poultry feed factory

Yukihiko FUJII, Shigeyoshi YOSHIDA and Tadashi TAKAHASHI

緒 言

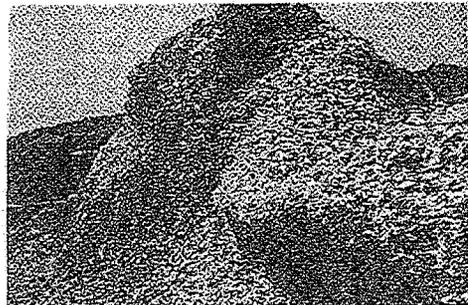
養鶏飼料工場のカキ殻堆積場におけるハエ類の夥たしい発生は、すでに、広島、岡山両県において大きな社会問題となっているが、本県においても、広島県（海田、廿日市、地五田方面）から移入したカキ殻、堆積場から発生するハエ類が、夥たしく附近民家に侵入し、同様な問題を起した。筆者等は、付近住民の強い要望もあり、1965年春から、直ちにこの対策について真剣に取り組んできたが、幸いにして、現在は、一応の指導方針をうち立てる段階に達した。以下に従来の調査研究の概要を報告し、参考に供したい。

本文に入るに先だって、懇切な御指導をいただいた香川大学教授松沢寛博士、微小ハエ類の同定をいただいた金沢大学教授堀克重博士、東京都立大学教授岡田豊日博士、名城大学講師岡留恒丸氏、農林省農業技術研究所福原楠男博士等の諸氏に対し、深甚の謝意を表す。また、この調査研究遂行について、日頃何かと御激励をいただいた香川県公衆衛生課長香川清氏、坂出保健所長寺内等氏に対し、心から感謝する次第である。

調査場所および方法

本調査研究の対象となった場所は、坂出市北西海岸の廃止塩田跡に建設された工場の原料置場で、敷地面積約4,000㎡、西北側は工場に隣接して人家約60戸が密集、東側は海岸および廃止塩田となっている。昭和40年（1965）には約3,000t、昭和41年（1966）には約4,000tが広島県から移入されたが、それらのカキ殻推積の状況は、第1図のようである。その高い部分は5～6mあり、堆積されたカキ殻の山の上をトラックが通れるようになっている。

発生するハエ類の調査は、主としてライト・トラッ



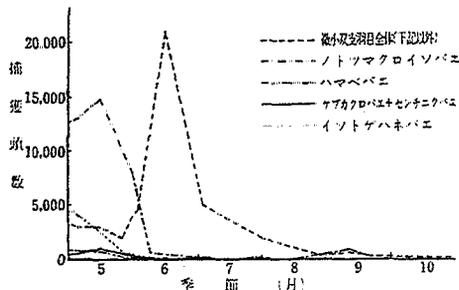
第1図 養鶏飼料用カキ殻の堆積状況

プによる捕獲（防除をかねる）と捕虫網によるスーピングによって行なったが、殆んどハエ類がライト・トラップにはいることがわかったので、数量調査のデータは、もっぱらそれによることとした。

調査成績および考察

上記方法にもとづいて行なった発生ハエ類の調査結果、ケバカクロバエ *Calliphora grahami*、センチクバエ *Sarcophaga peregrina*、イソトゲハネバエ *Trichochlamys borealis*、ノトツマグロイソバエ *Eucellia apicalis*、ハマバエ *Fucomyia (Coelopa) frigida*、フンバエ科1種 *Leptocena* sp.、ハヤトビバエ科1種 *Sphaeroceridae* sp.、ノミバエ科1種 *Phoridae* sp.、ハナバエ科1種(A) *Anthomyiidae* sp. (A)、ハナバエ科1種(B) *Anthomyiidae* sp. (B)の10種が確認された。これらのハエ類のライト・トラップによる捕獲成績は第2図のようで、ハヤトビハエやノミバエなどの微小ハエ類が数量的にはもっとも多く、とくに6月～7月頃に多かった。ついで多いのはノトツマグロイソバエで、5月～6月にとくに多かったが、5月頃は、また、イソトゲハネバエもかなり多かった。その他のハエ類は、以上の種類にくらべると、一般に非

常に少なかった。また8月以後のハエ発生は、いずれの種類も問題になる程ではなかった。



第2図 各種ハエ類の発生概況
(ライト・トラップによる捕獲成績, 1965)

しかしながら、こうしたハエ類の発生は、原料カキ殻が入荷する時期とも関係がありそうにも思われるが、これらの事情は十分把握できなかった。ただ、こうした夥ましいハエの発生が、主として原料カキ殻に付着したカキ肉小片にもとづくことは明らかで、8月以後のハエの発生の少ないのは、ライト・トラップによる捕殺もさることながら、すでにカキ肉小片が食尽されたことによるのかも知れない。

以上のようなが、なお、ここに、これらのハエ類の防除について付言したい。

前にものべたように、このカキ殻堆積場に発生するハエ類は、ライト・トラップに多量にとび込む習性がある。従ってその利用はきわめて望ましい方法と確信する。また、殻に付着するカキ肉小片を極力少なくするために、般積前にカキ殻をいったん海水に投入して洗滌すると、相当に肉小片の除去に役立つので(実

験済)、これまた、軽視できない方法と思う。さらに防除効果を高めるには、カキ殻の堆積に随時ナンコール等の比較的心配の少ない殺虫剤を施用することも経験上良い方法と考えるが、安全を期するために、直ぐには工場内の加工に廻らぬ部分に対してのみ施用するがよいと思う。筆者等は、この仕事の第2年目からは、上記の方法を実行することにより、かなり満足のいく成績を納めえた。

摘 要

養鶏飼料用のカキ殻に発生するハエ類に関し、1965～1966の2ケ年にわたり調査した成績をのべた。その概要は次のごとくである：

- (1)発生を確認したハエ類は、ケバクロバエ、センチニクバエ、イソトゲハネバエ、ノトツマグロイソバエ、ハマベバエ、フンバエ科1種、ハヤトビバエ科1種、ハヤトビバエ科1種、ノミバエ科1種、ハナバエ科1種AおよびBであったが、ハヤトビバエやノミバエ等の微小ハエ類がもっとも多く、次いでノトツマグロイソバエが多かった。全体的には、春から夏にかけて発生が激甚のようで、この頃が問題になるように思われたが、ハエのこうした発生傾向は、原料カキの搬入時期と関連するようと思われる。
- (2)これらの防除対策の主要なものとして、ライト・トラップによる捕殺、原料カキ殻を海水にて洗滌(積荷前に)することが考えられる。しかし、それでも不十分な時は、ナンコールなどの安全性の高い殺虫剤にて処理することが考えられる。